

## 暑熱対策をしっかりと

### 【牛編】

近年、ゴールデンウィークが終わるころに、「異常気象」、「真夏日」、「猛暑日」等の言葉を否応なしに耳にするとともに、最近では最高気温 40℃以上の日を「酷暑日」、最低気温 30℃以上の夜を「超熱帯夜」という言葉を日本気象協会が新しく決めました。

牛は人間より暑さに弱く乳用牛で 25℃、肉用牛で 30℃を超えると暑熱ストレスを受け、乳量の減少、乳質の悪化、増体・繁殖成績の低下等を起こしやすくなるので、人が感じる以上に快適な畜舎の環境をつくる必要があります。

暑熱対策には、  
畜舎環境対策として

- ・換気扇の増設
- ・屋根への遮熱塗料塗布
- ・遮光ネットの設置等

飼養管理対策として

- ・新鮮な水を十分に飲める
- ・(鈹塩、ビタミン、ミネラル) の補給
- ・密飼いを避ける

- ・毛刈り
- ・飼料の品質劣化に注意と飼槽の清掃等に大別されます。

「換気状態の判断ポイント」

- 不愉快な臭い  
(アンモニア臭で目が痛くなる等)
- 蒸し暑く不愉快
- 牛床の上で立っている牛が目立つ
- 牛床や通路がいつまでも乾かない
- メガネが曇る

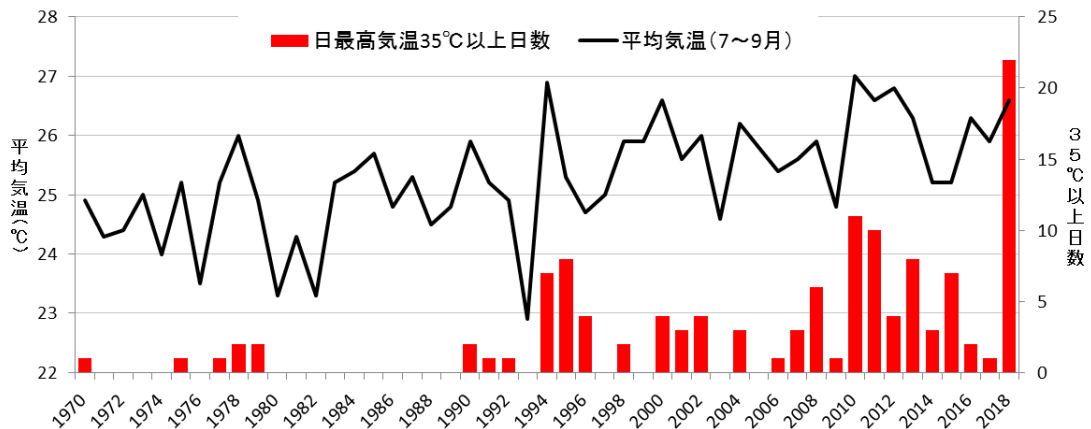
高泌乳牛、分娩前後、肥満、基礎疾患(乳房炎、肺炎、腸炎等)牛はハイリスク牛なので要注意です。このようなハイリスク牛は、早めに涼しい場所へ移動しておきましょう。

以下の症状が認められたら直ぐに対応を！

- 飼料の食い込み低下
- 著しい目の充血
- 飼槽が濡れるくらいの多量のよだれ
- 開口での荒い呼吸

暑熱の影響は秋以降の生産性低下にもつながります。今年も適切な暑熱対策で牛のストレスを減らし、生産性の低下を防ぎましょう！ (片桐)

滋賀県(彦根) 平均気温および35℃以上日数 (気象庁データ)





## 【豚編】

豚は汗による体温調節ができないうえ、身体が厚い皮下脂肪で覆われているため、暑さが苦手です。気温が25℃を超えると肥育成績や繁殖成績の低下を起し易くなります。人が感じる以上に快適な畜舎環境を設定してあげる必要があります。

暑熱対策は、畜舎環境面と飼養管理面に大別されますがこれらを組み合わせることが効果的です。適切な対策を行い、夏を乗り切りましょう！

- ◆豚舎の風の流れを良くする。（乾いた風が豚体に届くようにする。換気の効率をアップさせるため通路などを片付ける）
- ◆日射熱を遮断。（屋根等への断熱塗料（ドロマイト石灰等）の塗布、豚舎周囲への消毒を兼ねた消石灰の散布、よしず、グリーンカーテンの利用など）
- ◆新鮮な飲水を確保。（給水設備の点検・清掃など）
- ◆密飼いの防止。（目安：1坪あたり、肉豚なら4頭、母豚なら3頭以内）
- ◆毎日の豚の観察。（食欲、呼吸の状態など、こまめにチェック）
- ◆夏向けの飼料給与。（涼しい時間帯に消化の良い飼料を給与。給与回数を増やす、ビタミン添加など）（根本）



## 【鶏編】

暑さによるストレスは鶏の成績に障害を与える大きな要因となります。気温が上昇するとともに、鶏にはいくつかの兆候が表れてきます。気温が27℃程度まで上昇すると、まず飼料の摂取量が低下し、その後産卵率や卵重の低下などが表れてきます。

鶏はほかの動物と異なり、体温を放熱する役割をする汗腺がありません。そのため、環境温度が35℃を超えると、鶏は口を開けて呼吸（パンティング）をすることで体内の熱を排出し、体温を調節しようとします。パンティングが過剰になると、体内の二酸化炭素が過剰に排出され、体内の酸・塩基がアンバランスとなり、増体、産卵性、免疫機能の低下を引き起こすこととなります。

本格的に暑くなる前に鶏舎環境と設備の整備をしておくことが非常に重要です。飲水機器、換気ファン等の確認を行い、鶏舎周辺の空気の流れを遮るものや、熱源となってしまう鶏糞を取り除いておくようにしましょう。

夏、気温が最も上がる午後に西日が入ると、夜間から朝にかけても温度が下がらず暑熱の影響をダイレクトに受けてしまいますので寒冷紗の設置がお勧めです。また冷たく新鮮な水の給与を心がけ、暑い時間帯には給餌を避けたり、ストレスがかかる作業は涼しい時間帯に行ったりといった調整が必要です。（金谷）